

華麗なるハプスブルク帝国——その永遠の光芒（六）

母を超えた？ 十女マリア・カロリーナ

富山典彦

いくつもの言語が交錯しているヨーロッパにおいて、人の名前についてはたまに迷わされてしまうことがある。フランス王ルートヴィヒ十四世 Ludwig XIV.とは誰？ ドイツ語の文献を読んでいると、ルイはルートヴィヒと書かれているから、あの有名な太陽王もこういう表記になる。これくらいなら問題ないが、ハプスブルク帝国と関わっていると、ハンガリー語やチェコ語など、十を超える言語と向き合わなくてはならないから、ついドイツ語の表記で間合わせてしまう。

人名もそうだが、地名となると、もっと大変だ。例えば、ハンガリー王の戴冠式が行われていた Pressburg がそ

の恰好の例だろう。ハンガリーの首都といえばブダペストということになるが、オスマンに占領された時代をもつハンガリーでは、かなりの期間、ウィーンに近いこのプレスブルクがハンガリーの首都であり、また、ハンガリー王の戴冠式が行われた場所でもあった。プレスブルクの聖マルティン教会がハンガリー王の戴冠式の場所で、マリア・テレジアもそこで「ハンガリー王」の戴冠をしている。ウィーンにほど近いドナウ川の都市プレスブルクは、ドナウ川をさらに下ったところにあるブダペストに比べると、かなり小さいし、聖マルティン教会も、大聖堂のような壮大なものではない。

さてこのプレスブルクだが、現在はスロバキア共和国の首都で、スロバキア語で言うところにはプラティスラヴァ。われわれの地理の慣習では、地名は現地の人たちがどう呼んでいるかによるから、「マリアーテレジアはプラティスラヴァで戴冠した」と言わねばなるまい。ただ、当時のハンガリー人たちが、まさかスロバキア語を使っていたはずもないから、問題はさらに複雑になる。そのうえ、ハンガリー宮廷の公用語は、当時はラテン語だったということだから、こうなるともう手に負えない。

さて、「ハンガリー女王」ではなく「ハンガリー王」であるマリアーテレジアには、十六人の子どもがいる。そのうち、男の子は五人で、女の子は十一人。なかには可哀想なことに、誕生してすぐ死んだ子どももいるし、かなり成長して、いよいよ結婚だというのに、疱瘡にかかって死んでしまったプリンセスもいる。そのなかで有名なのは、長男ヨーゼフと三男レオポルト、それに十一女マリーアン・トワネットだろうか。長男ヨーゼフは、父である皇帝カール六世の死後、ただちに皇帝ヨーゼフ二世として戴冠している。三男レオポルトは、ハプスブルク家の家領から除外されていたトスカナ大公国をもらい、トスカナ大公になっ

ていたのだが、兄ヨーゼフ二世の早すぎる死により、皇帝レオポルト二世になった。そして末の娘マリーアン・トワネットだが、実は彼女は、マリアアン・トワニアであった、フランス王太子ルイと結婚したために、フランス語の名前となり、マリーアン・トワネットになったのである。

実は、マリーアン・トワネットのすぐ上の姉が、幼い頃からマリーアン・シャルロットと呼ばれていた。それはいったい、どういうことなのか。この頃ちょうど、宿敵だったハプスブルク家とブルボン家とは蜜月時代に入っていて、いくつもの縁組みが成立していた。フランス王太子ルイとマリアアン・トワニアとの結婚が、その最後にして最大のものであったのだが、本来は、マリーアン・シャルロット、ドイツ語で言うところのマリアン・カロリーネこそが、フランス王妃になるはずだったのである。だから、幼い頃から予定されていたフランス王太子の結婚のために、ウイーンの宮廷にいた時代から、マリアン・カロリーネではなく、マリーアン・シャルロットと呼ばれていたのである。

運命は皮肉なもので、マリーアン・シャルロットのすぐ上の姉のマリアン・ヨゼファが、ブルボン家のナポリン・シチリア王と結婚することになっていたのである。結婚直前に疱瘡と

も呼ばれた天然痘に罹って死んでしまったのである。この頃はこの病気が流行していたようで、マリア・テレジアの娘のなかでもっとも「美人」とされていたマリア・エリーザベトも、その美貌を活かして、歳の離れたルイ十五世の後妻になる予定だったのに、天然痘に罹り、生命を失わなかったかわりに、自らも鼻にかけていたその美貌を失い、修道女として一生を終えることになったのである。

そういうわけで、マリー・シャルロットが、姉のかわりにナポリ・シチリア王国のフェルナント三世と結婚することになったのである。名前も、イタリヤ風に、マリア・カロリーナ。これが彼女の生涯の名前になる。そして玉突き式に、そ妹のマリア・アントーニアが、マリー・シャルロットに代わって、フランス王妃マリー・アントワネットとなったわけである。この皮肉な運命がなければ、フランス王妃はマリー・アントワネットではなくマリー・シャルロットだったはずである。そうすると、ギロチンで断首されたのは、マリー・アントワネットではなく、マリー・シャルロットだった、と歴史は書き換えられなくてはならないだろう。とはいえ、ナポリ・シチリア王妃としてその才覚を遺憾なく發揮した彼女なら、フランス革命を未然に

防げたかもしれないし、革命が起こってもその進行方向を変えることができたかもしれない。歴史に「もしも……」がないのは、残念な話である。

歴史的事実を、感情を入れずに書くとするれば、こうなるだろう。一七五二年八月十三日にハプスブルク家の夏の離宮シェーンブルン宮殿でマリア・カロリーネは生まれた。マリア・テレジアの十女で、下には、一七五四年生まれの四男フェルディナント・カール、一七五五年生まれの十一女マリア・アントーニア、一七五六年生まれの五男マクシミリアン・フランツがいる。一七五一年に生まれて一七六七年に死んだすぐ上の姉マリア・ヨゼファの代役として、マリア・カロリーネは、一七六八年五月十二日に、ブルボン家のナポリ・シチリア王フェルナント三世と結婚し、マリア・カロリーナになった。

当時のマリア・テレジアは「完璧な母親」だったが、あるときマリア・カロリーネを、こんなふうに叱りつけた。

「私はあなたのこの不躰を忘れることはできません。あなたを決して許しません。あなたの声とあなたの言葉は、ただただだけでもう我慢ができません。あなたは決

して声を出してはなりません。あなたは物思いにふけつていなくてはなりません。そうすることで、あなたがふさわしくない意見を述べることなどなくなってしまうからです。」

「完璧な母親」は娘たちに、何事につけても自分に従うことを要求したのだ。マリア・カロリーネは母親に「不躰」と非難されているが、それはその場に「ふさわしくない意見」をはっきりと述べるからであり、実はそれこそ、マリア・テレジア自身の特徴でもある。自分に似ているから好き、というのもあるが、自分に似ているから嫌い、ということも不自然ではあるまい。

マリア・カロリーネ、当時はマリー・シャルロットと呼んでいた彼女は、妹のマリア・アントーニア、のちのマリー・アントワネットと一緒に育てられたから、よけいにならぬ違いが母親の目に止まったのだろう。繰り返しになるが、マリア・カロリーネが予定通りフランス王妃になっていたなら、歴史はどう変わっていただろう。その別の歴史を見てみたいものである。

さて、ブルボン家との縁組みを考えていたマリア・テレ

ジアは、本家フランスよりも前に、ナポリの王位継承者と自分の娘との結婚に踏み切った。マリア・ヨゼファに代わって一歳年下のマリア・カロリーネが、一七六八年五月十二日に十七歳のナポリ・シチリア王フェルナント三世と結婚する。ブルボン家ではあるが支配地が南イタリアなので、このとき名前もイタリア語で、マリア・カロリーナとなる。繰り返しになってしまったが、マリア・テレジアにとっては、娘の幸せなどよりも、ブルボン家との和合、そしてそれによる世界の平和こそが大事だったのである。

マリア・テレジアがマリー・アントワネットと交わした手紙については邦訳（パウ・クリストフ編・藤川芳朗訳『マリー・アントワネットとマリア・テレジア 秘密の往復書簡』岩波書店、二〇〇二年）が出ていて、その内容について容易に知ることができるが、当然のことながら、マリア・カロリーナも同様の往復書簡を交わしている。要するに、ハプスブルク家とブルボン家との間を、これらのプリンセスたちが取り持つという使命を与えられているのである。

マリア・テレジアも、どちらかというと政治的には無能な夫と結婚したが、マリア・カロリーナも同じく、フェル

ナント三世は、政治よりは狩猟に興味がある夫だった。しかも、その父親の代から政治を仕切っていた大臣たち、とくにベルナルド・タヌツイーなる者の横暴はひどいものだった。もちろん夫はそんな横暴を見て見ぬ振りをしたことだろう。

以前、イタリアを北からナポリまでバスツァーで旅したことがあるが、北イタリアはドイツの続きのような感じで、イタリアの個性を色濃く出しながらも、町並みはまだ整然としている。南に行くと、自動車はクラクシオンを平気で鳴らす。窓辺に花を飾っている北に対して、南は平気で洗濯物を干している。バスのガイドが言うには、「イタリア人」というのは存在しなくて、トスカナ人とかヴェネツィア人とかナポリ人とかいう、地方の存在が集まってイタリアを形成しているから、地方によつて気性も態度も違っている。そう言われてみれば諺に「ローマではローマ人のするようにせよ」というのがあった。

ウィーンも、北ドイツからみればかなりいい加減なところがあるが、アルプスを越えたイタリアよりはるかに几帳面だろう。ローマを越えて南イタリアに行くと、そこはもう別世界であるに違いない。ナポリの対岸にあるシチリア

島ともなると、あのマフィアの出身地ということになっているくらいだから、ナポリともまた別世界だったはずだ。そして、六歳のときの初恋を实らせて幸せな結婚をしたマリァ・テレジアの十女、マリァ・マリァ・カロリーナは、自分の意思ではなく、ナポリとシチリアを束ねる王家の王妃になったのである。

ハプスブルク帝国の「女帝」と呼ばれた母に似て、利発で活発な性格のマリァ・カロリーナは、ほとんど無秩序とっていいこの国の政治に、なんとか秩序をもたらそうと努力する。無能な夫は、狩りにでも、それこそ「夜釣り」にでも行っていればいい。

マリァ・カロリーナが結婚した翌年、兄のヨーゼフ二世がこの国を訪れる。何をどう話したか、それはもちろん最大の国家機密だろうが、ハプスブルク家とブルボン家とが手を取り合つて、ヨーロッパの秩序と平和とを維持しなくてはならないのだから、しかたあるまい。夫が政治的に無能であり、政治にそもそも関心などもたないから、よけいにそうだ。

タヌツイーの後継者ジョン・アクトンも、民衆からも貴族からも不人気で、失政をする。この国の「女王」マリ

ア＝カロリーナは政治改革、とくに海軍の改革に手を染める。ほとんど海のないハプスブルク帝国と違って、半島の先にあるナポリ王国とそもそも海に囲まれた島のシチリア王国だから、国を守るのにはやはり、優秀な海軍である。

海軍というのももちろん、祖国オーストリアではなく、あの大英帝国である。マリア＝カロリーナはイングランドに身を寄せる。とりわけ、フランス革命が起り、妹のマリー＝アントワネットが一七九三年に処刑されてからは、フランスの情勢には注意を払った。

この間にマリア＝カロリーナは、次々と子どもを出産し、自分がそうされたように立派に育て上げる。もちろん、ヨーロッパの政治は、たとえフランス革命でフランス王と王妃が処刑されようとも、王侯貴族の結婚によって成立していると考えていたからである。

その手始めが、フランス革命の翌年、母親と同じ名前を与えた娘のマリア＝テレジアと、弟レオポルト二世の長男フランツとの結婚だ。男児の生まれなかったヨーゼフ二世が皇帝在位中に、弟のトスカナ大公レオポルトの長男フランツを後継者にすることを決めていた。ただ、この同じ年にヨーゼフ二世が死んでしまったために、トスカナ大公レ

オポルトが急遽兄の跡を継ぐことになったが、そのレオポルト二世も一七九二年に死んでしまい、「お人好し」というあだ名を与えられたフランツが、最後の神聖ローマ皇帝フランツ二世となり、この困難な時代の皇帝として、その無能ぶりを遺憾なく発揮することになる。

政治的に無能な皇帝が、必ずしも悪いとは思わないし、そのほうがかえっていい場合もあるが、ただこの時代は、そういうわけにはいかない。祖母の名前をもらったマリア＝カロリーナの娘ではあるが、残念ながら「女帝」にはなれず、フランス革命の行き着く先に登場した「フランス人民の皇帝」ナポレオンに翻弄されることになる。

ルーブル美術館に、白馬にまたがった將軍ナポレオンがアルプスを越える姿を描いた絵画が飾られている。もちろんこの絵には、かなり創作の手が加わっているようで、コマージュの写真的下に書き加えられる「これはイメージです」という一行を、この見事な絵画にも描き加えておく必要があっただろうが。ナポリとシチリアにまでナポレオン率いるフランス軍が押し寄せてきてもらっては困る。ナポレオンのアルプス越の二年後に、ナポリ王国はフランス共和国に宣戦布告する。このとき、フランスは共和国だっ

たのである。

しかし、天下無敵のナポレオンは、予定通りイタリア半島を制圧する。マリアⅡカロリーナは、イギリス海軍の提督ネルソン卿の助けを借りて、なんとかシチリアのパレルモに逃れる。「女帝」の才を発揮した母親に似たマリアⅡカロリーナは、教皇領を回復しようとした試みが頓挫したのち、今度は反ナポレオンの組織を編成しようとする。

もちろん、これも成功せず、一八〇〇年七月には、シチリアからウィーンに向かっている。娘婿の神聖ローマ皇帝フランツ二世とどんな話し合いをしたのか、詳細は不明だが、ナポリⅡシチリア王の夫も、神聖ローマ皇帝の甥にして娘婿も、誰も当てにはできない。もちろん、自分で武器を持つて戦うこともできない。

一八〇二年には、短期間だがナポリに帰還する。「ナポリを見て死ね」という有名な諺があるが、これはもちろん、ナポリの美しい風景を称えたものである。美しい海岸のラインと山、その山はあの有名なヴェスヴィオ火山である。かつて、ポンペイという古代ローマ帝国の都市を、丸ごと火山灰の下に埋めてしまったものすごい火山である。しかしこのときは、この諺も、本当にここで死ぬかもしれ

ないという危機を示していた。

それなりの覚悟を決めてナポリに帰って来たマリアⅡカロリーナだったが、フランスから逃れてきた難民の群と、地震と火山の噴火とで、この地域は混乱の極致にあった。人為的災害と、人の力ではどうすることもできない天災。マリアⅡカロリーナにはいったい、何ができただろうか。それでも彼女は、ロシア皇帝に援助の申し出をしている。

一八〇四年にナポレオンは「フランス人民の皇帝」になり、続いて神聖ローマ皇帝フランツ二世は、「オーストリア世襲皇帝」フランツ一世を名乗る。ウィーンの宮廷博物館には、神聖ローマ皇帝の帝冠とオーストリア皇帝の帝冠とが並んで展示されている。神聖ローマ皇帝の帝冠より立派なオーストリア皇帝の帝冠だが、これは実は、プラハに宮廷を移した皇帝ルドルフ二世が私的に作らせていたものだった。弟マティアスとその一党に皇帝退位を強要されたルドルフ二世だったが、その私的な冠を頭に乘せたフランツ二世・一世は、神聖ローマ皇帝退位の現実を直視していただろうか。頭一つに帝冠二つなど、載せられるはずもない。

一八〇五年、あの有名なトラファルガーの海戦で、大英

帝国はフランス・スペイン連合軍を破り、ナポレオンに一矢報いはするが、肝心のネルソン提督は戦死してしまう。マリアⅡカロリーナにとっては、手痛い喪失だ。なにしろ、夫も娘婿の甥も、まったく当てにならないのだから。

翌年、遂にすべての援助者が手を引いてしまい、マリアⅡカロリーナはナポリからシチリアのパレルモに逃走する。皇帝ナポレオンは、自分の弟ジョゼフを王に据える。ナポレオンの「業績」については、例えば、ヨーロッパ再編ということが挙げられるのではないだろうかと、密かに考えている。というのも、三百あまりあった神聖ローマ帝国の領邦を、四十程度に減らして、現在のドイツ連邦共和国の連邦州の基礎を作っている。グリム兄弟がしばらくその図書館の司書を務めたヴェストファーレン王国は、ナポレオンがその末弟ジェロームを王に据えてできた王国である。

それはさておき、二つの帝冠を頂いていたフランツ二世・一世は、マリアⅡカロリーナが逃亡した一八〇六年に、神聖ローマ皇帝を退位している。事実上名前だけだったとしても、いや、名前だけだったからこそ、その「名」を消してしまうのは重大な問題である。ナポレオン失脚後

のウィーン会議で、ヨーロッパを旧体制に戻そうとして、ブルボン家のフランス王も復活するのだが、神聖ローマ皇帝は復活することはなかった。

ナポレオンにはジョゼフィーヌという「妻」がいて、死ぬ直前に「ジョゼフィーヌ！」と叫んだというエピソードが残っているが、この女性を皇帝妃というには、いろいろ差し障りがあった。ということ、ヨーロッパに君臨する最高の立場であるフランス皇帝、正しくはフランス人民の皇帝の位をより確かなものにするために、ナポレオンはしかるべき身分の女性と結婚することになる。

その女性とは、オーストリア皇帝フランツ一世の娘マリアⅡルトヴィカである。その母は、マリアⅡカロリーナの娘のマリアⅡテレジアで、曾祖母はあの「女帝」マリアⅡテレジアだから、出自としては申し分ない。一八〇九年にナポレオンはジョゼフィーヌと離婚し、翌年、マリアⅡルトヴィカはフランス皇帝妃マリアⅡルイーゼとなる。しかし、ウィーンでの代理結婚で、いまだ本当の夫婦にはなっていないが。

自分の孫が宿敵ナポレオンの妻になるなどとは、「女帝」の母に劣らず息の荒いマリアⅡカロリーナは、この結婚に

大反対で、激怒したということだが、もうどうすることもできない。

一八一三年にマリアⅡカロリーナは、イギリス人の圧力でシチリアを去り、ただ一人でコンスタンティノーブルからオデッサを経由してウィーンに帰還する。そして翌年の九月八日に、ウィーン近郊のヘッツェンドルフで、心臓発作により死亡する。遺体は、ハプスブルク家の霊廟であるカプチン派教会に納められる。そこにはすでに、両親や兄弟姉妹の幾人かが永眠している。

夫は妻が悪戦苦闘している間、いったい何をしてきたのか。しぶとく生き残り、翌年から始まるウィーン会議で、妻マリアⅡカロリーナが希望したように、ナポリ王国を取り戻すことになる。ナポリ王かつシチリア王であったフェルナント三世は、やはり頭一つに王冠二つは無理だと判断したのか、一八一六年十二月八日に、この二つの王国を一つにして、両シチリア王国として、この王国の初代王フェルナント一世となる。

妻がそこまでのレールを敷いてくれたというのに、妻がウィーンで死んだ三ヶ月後には、密かに、ルチア・ボルジアと結婚している。このあたりの事情については、い

ろいろと話がありそうだが、それはまた別の機会に譲ることにしよう。

マリアⅡテレジアの十女マリアⅡカロリーナは、こんな男性となんと四十六年間も結婚生活を続けて、十七人の子どもを産んでいる。母が十六人だったから、その点では母に勝っていた。母がしたように彼女も、自分の子どもたちをヨーロッパの王侯貴族たちと結婚させた。

自分の母の名前を与えた娘マリアⅡテレジアと、のちの皇帝フランツ二世・一世との結婚はすでに挙げた。別の娘マリー＝ルイーゼをトスカナ公フランツと結婚させている。このトスカナ公はのちにナポリ＝シチリア王フランツ一世となつてゐる。マリアⅡクリスティーナはのちのサルディニア王カールⅡフェリクスと結婚し、マリー＝アメリーはオルレアン公ルイ＝フィリップと結婚している。なお、このオルレアン公は、フランス七月革命のときに、市民たちによってブルボン家の王が廃されて、新しいフランス王に選ばれている。断頭台で死んだフランス王妃と同じ名前のマリー＝アントワネットは、のちのスペイン王フェルナンドスと結婚している。

マリアⅡカロリーナ自身は、政略結婚のために、好きな

男性とは結婚できず、異国の王と結婚しなくてはならなかったが、その娘たちも、やはり同じ運命をたどっている。しかし、時代は移りつつあり、これらの結婚がどの程度ヨーロッパの政治情勢に役立ったのか、今のところ、一つ一つ検証する余裕はないが、どのような立場になろうとも、ひとりひとり別の個性をもって生まれ、それぞれの運命に従ってその人生を生きたことは確かである。

(付記)

「華麗なるハプスブルク帝国——その永遠の光芒」と題してエッセイを『成城文藝』に毎号書き続けているが、前号は「(四)」で今号は「(六)」「(五)」が抜けてしまっているが、「(五) フラント一世と喪服の「女帝」」は、成城大学大学院の紀要『ヨーロッパ文化研究』第36集(二〇一七年三月)に掲載している。